

藤村童話研究史の傾向

富田和子

はじめに

藤村の作品の内、藤村童話とは、彼自身が〈童話〉と認め、童話叢書に収めた『幼きものに』大正6(一九一六)年〔藤村童話叢書四篇 昭16(一九四一)年〕・『ふるさと』大正9(一九一九)年〔同二篇 昭16〕・『をさなものがたり』大正13(一九二二)年〔同三篇 昭16〕・『力餅』昭和15(一九四〇)年〔同一篇 昭15〕の四作品を指すとみて考察する。

1 藤村文学研究における童話の位置

藤村は、明治5(一八七二)年旧暦2月17日(新暦3月25日)、筑摩県第八大区五小区馬籠村(現在、長野県木曾郡山口村字神坂)に、この地で代々庄屋・本陣・問屋を兼ねた旧家の島崎家に、17代当主の父正樹・母ぬいの四男として生まれ、春樹と命名されてから、昭和18(一九四三)年8月22日大磯で永眠するまで、明治・大正・昭和に亘る72年間を生きた。初めて著作が雑誌に掲載されたのが、21

歳(数え年。以後すべて数え年で表記。)の時で、明治25(一九〇二)年1月2日発行の「女学雑誌」への翻訳文および小論であったから、ここから数えても、執筆活動は52年に亘り、特に、明治30年26歳で『若菜集』を出版して浪漫主義の新体詩人の代表格となり、同39年35歳の時『破戒』を自費出版して自然主義作家と称され評価を得た。その後、昭和初期に興った円本ブーム以降、作家としての経済的成功を見る。そして、昭和10年64歳で日本ペンクラブの初代会長に就き、72歳で没するまで務める。

そのためであろう。これまで藤村とその文学の研究は盛んに行われ、研究史や展望が幾度も試みられている。例えば、佐々木雅發は『島崎藤村』「解説——島崎藤村研究史——」(日本文学研究資料叢書 有精堂出版 昭46・2初版・同48・4再版 三一八頁)で、それまでに試みられた研究史のおおよそのものを列挙した後で、「破戒」評価の変遷を中心に〈研究の現状〉を示すし、中島国彦は『島崎藤村Ⅱ』「解説——今日の藤村研究・明日の藤村研究——」(日本文学研究資料叢書 昭58・6 二九三頁)で、藤村童話も収める筑摩書房版『藤村全集』の刊行が寄与した研究の進展を示すけれども、いずれも『春』や『夜明け前』を中心とした研究の進展と反省であ

り、「藤村童話の分析がどう『夜明け前』論に結び着いているか、その微妙なつながりに注意しておきたい。」(二九四頁)と長編小説との関わりの中で藤村童話に触れるばかりで、「残された問題の中(から)には取り上げていない。

そして、瓜生清が『近代作家研究辞典』「島崎藤村」の項(桜楓社 昭58初版・同60改訂 一九四頁)の【研究の展望と指針】に示されるのは、伝記研究・作家論の他、作品研究では、『若菜集』をはじめとする詩集と『破戒』『新生』『春』『夜明け前』という長編小説を中心とした作品論とそれを論じるための紀行・随筆の研究が展望されるのみで、「その他、長編小説の谷間を埋める『食後』『微風』等の短篇集の分析、童話『新片町より』等の感想集についての解明など、細部にも問題は残るが、今後、藤村文学の展開を串刺しにする視点の確立をめざした活発な議論が望まれる。」(一九六頁)と、童話は細部の問題という扱いをされる。

更に、十川信介も『日本現代文学研究必携』「島崎藤村」の項(別冊国文学・特大号)昭58・7 学燈社 六一頁)の「今後の研究課題」で、「そのほか、長編と短編、小説と童話の相関関係、自伝的長編における実生活の虚構化の問題などにみられる藤村の小説作法や思考のパターンを探ることも重要である。」(六九頁)と、小説との関わりで童話を考えることを示すばかりである。

時代は平成に移るがその傾向に変化はなく、遠藤満義は「新・現代文学研究必携」『島崎藤村』の項(別冊国文学)44 平4・11 五九頁)の「研究の現在」で、「童話に関しては飛田文雄『藤村の童話 その位置と系譜』(双文社出版 昭58・4)が出た。」(六三頁)と紹介するのみで終わっている。

荻禎子の「藤村研究史」(『透谷・藤村・一葉』明治書院 平3・

7 一八九頁)では、再び藤村童話に触れることなく、詩と小説を中心に論じられる。

そして、有精堂編集部による『時代別日本文学史事典 近代編』(有精堂出版 平6・6)が刊行されたが、児童文学の項はなく、藤村の記事にも童話は触れられていない。

木戸雄一も『島崎藤村』(全国大学国語国文学会編『文学・語学』165(特集)平成十年国語国文学界の展望(Ⅱ)(近代)平11・10 三八頁)で、『夜明け前』『新生』論を紹介し、その他の作品に関する論は少ないと述べるばかりである。

このように、未だ作品論では詩と小説が中心で、藤村研究における童話の位置は低い。

一方、日本の近代児童文学史の側面から、五十嵐康夫は「児童文学この百年の流れ」(『国文学解釈と鑑賞』61-4(特集)児童文学この百年)至文堂 平8・4 一〇頁)で、「藤村が、童話を書き始めた大正期の初めは、近代日本児童文学の黎明模索の時代でもあったわけであ」(一二三頁)り、大正期の児童文学は、島崎藤村・田山花袋・徳田秋声・与謝野晶子・野上弥生子という当代の人気作家五人に書き下ろして依頼した、藤村の『眼鏡』をはじめとする「愛子叢書」(実業之日本社 大2) 5冊から始まり、「大正期の日本児童文学は、童話・童謡の黄金時代であったといえよう。」と評価する。

菅忠道は『日本の児童文学』総論(増補改訂版 大月書店 昭31・4初版・昭47・4増補改訂版4刷)で、大正初期の「過渡期の児童文学」として、「愛子叢書」を児童文学の新しい転換の具体化に寄与したと位置付けるものの(八二頁)、日本の児童文学の近代的確立のために、自然主義派の詩人・作家たちの仕事は、ほとんど反映されなかつたといっている。(八六頁)、彼らの児童文学は、「小

説としての物語的構成は、きわめて弱い。」(八八頁)と指摘する。さて、『眼鏡』出版の4年後、藤村は『幼きものに』(実業之日本社 大6)を出し、「赤い鳥」創刊号(大7・7)掲載の童話「二人の兄弟」をはじめとして、「小学女生」「金の船」「小学少年」「小学少女」「婦人之友」「婦人公論」「少女界」「女性改造」「小学男生」他の雑誌や読売新聞等に短編童話を載せつつ、『ふるさと』(大9)、『をさなものがたり』(大13)を、ほぼ3年おきに刊行。そして、17年後の昭和15年に「藤村童話叢書」と銘打って第一篇『力餅』を刊行し、翌年、第二篇『ふるさと』第三篇『をさなものがたり』第四篇『幼きものに』として初版を一部改変して収め刊行する。

その『ふるさと』が発行された頃、子供であった久保田正文の「あいつかまた相逢うて」(『藤村全集』月報11〔第9巻付録〕筑摩書房 昭42・7 七頁)から、(引用に際し、旧漢字体は新漢字体に改め、促音表記は現行の小文字表記に改めた。傍点、は、富田による。以下、同じ。)

父が、童話集『ふるさと』を買ってくれたのは、私が小学校三年生のときであった。校長会で、飯田の町へ出たときのみやげであった。そのあとで、『幼きものに』も買ってきてくれた。『をさなものがたり』の刊行されたときには、私はもう六年生であったから、新聞か雑誌かの広告でその発刊を知り、振替用紙で出版社へ金を送ってとりよせたはずである。

かぞえ年十歳のムスコの私に、『ふるさと』を読ませようとしたころ、父はじぶんでは『新生』をよんでいなかったはずはないとおもう。すくなくとも、その〈事件〉を知らなかったはずはない。しかしそういうことに関係なく、あの童話本を私に与えたのは、

やはり郷土の先輩作家という親近感からであったのだろう。(略)藤村の童話は、少年の私にそれほどおもしろかったわけではないが、立川文庫や『少年倶楽部』にあまり親しみのなかった私は、いくらか退くつしながらも、草の葉や木の枝や麦の穂で手製の玩具や楽器をつくることを知っている少年たちの話などにそれなりの親近を感じたりしていた。

小学校六年を卒業の年、……飯田の町……へ出た私は、父のとりつけの本屋へ行つて、新潮社版名作選集のなかの『春』上・下二冊を買った。濃いセピア色の絹表紙の小型本であった。得意になつて家へ持つて帰つたら、おまえが読むのには、まだ早い、といつて母にとりあげられた。

と、藤村の童話は親にとつてお土産としても、子供が自分で取り寄せても、小学生の子供に安心して与えられるものであり、一方、与えられた子供にとつては〈それほどおもしろかつたわけではな〉く、親近感を持つものの〈いくらか退くつ〉するものであり、それに対して、藤村の小説の方は小学校六年の子供には〈おまえが読むのにはまだ早い〉とすぐさま取り上げられるものであった状況が窺える。

当時は与える親の側に、それほど藤村童話への信頼感があったとはいえず、(特集Ⅱ『児童文学の世界』(『国文学解釈と鑑賞』48-14 昭58・11)では、「児童文学作家論」に、小川未明・壺井栄・千葉省三・坪田譲治・新美南吉・浜田広介・宮沢賢治の七名が取り上げられるばかりで、藤村は「作家の児童文学」の中に、芥川龍之介・有島武郎・川端康成と並んで取り上げられる扱いを受ける。

そして、(特集Ⅱ『児童文学の百年』(『国文学解釈と鑑賞』61-4 平8・4)になると、「児童文学作家論」には、先の7名と、巖

谷小波・塚原健二郎の合計9名が取り上げられるばかりで、「作家の児童文学」は紹介されず、よって、藤村は取り上げられていない。このように日本の近代児童文学史の側面からも児童文学作家としての藤村の影は薄くなるばかりで、現在もその評価に変化があるとはいえない。

そこで、次項では、藤村童話の研究史を展望するために、作品論のみにこだわらず、藤村童話について書かれた小論も視野に入れる。

2 藤村童話研究史

秋田雨雀は『少年読本』を読んで 島崎藤村氏の近業（『東京朝日新聞』大13・2・17 6面「学芸」欄）で、三作目の『をさなものがたり』を読んで、「上京後のお父さんの見聞から生まれたものは、実に最も優れた東京の印象記でもあり、また最も平易な言葉で書かれた国民史といふとも出来ませう。」島崎さんが最期の芸術様式を童話に選ばれたことは、島崎さんのためよりも、日本の子供及び子供の芸術のために喜ばしいことです。」と歓迎する。

とはいえ、これ以前に『幼きものに』と『ふるさと』の二作があるが、それらについて論じたものを見ることができなかった。

そして、藤村が64歳で、10月に「夜明け前」第二部が完結し、日本ペンクラブ発会、会長に推されて就任する年、昭和10年2月21日付の榎本楠郎「島崎藤村の児童讀物研究」（秋田雨雀編『島崎藤村研究』楽浪書院 昭10・11 三四一頁）では、（傍点・は、榎本による。）

とにかく『幼きものに』は^(ママ)相当「一人に読まれ」た。そして三

年後の大正九年（一九二〇年）十二月、『幼きものに』の十四版と同時に第二著書『ふるさと』が出版された。これによって氏のこの分野に於ける確乎たる位置が定まり、氏もまた励まされて、『をさなものがたり』（一九二四年）『藤村読本』（一九二六年）『藤村少年読本』（一九三〇年）など漸次仕事を押し進めて行った。（三四三頁）

と、『幼きものに』が（十四版）を重ねる程、読まれ、近代児童文学においても（確乎たる位置）が定まったと述べ、「（童話）……といふ用語を……日本で慣用の（児童文学）または（少年文学）の意味に用いてゐる」（三四九頁）と指摘し、「興味中心主義または教訓第一主義の（童話）……を否定して、何よりも芸術作品であることを望み、その芸術的教化力を認めてゐるわけである。……藤村氏の児童文学に関心を持った動機は生活力の萎靡沈滞からであったが、その作家的活動は寧ろその当時のその領域に於ける開拓的な寄与となった。」（三五一頁）と指摘する。が、藤村の「児童文学観の不徹底さ……のために氏の作品の発展性を阻止されてゐるやうである。」（三六五頁）とみる。

小山東一は「童話作家としての藤村」（『文学』4—8 岩波書店 昭11・8 四三—一六五頁）で、『幼きものに』『ふるさと』『をさなものがたり』の三作から、「童話といへば直ちに面白い話をもつたものといふ伝統的な考へ方からすれば藤村の童話は面白くない童話である。……散文詩として見るときに面白いのである。」（四八—七〇頁）「藤村の童話の教訓が露骨なものでないといふことは、……又詩人の態度ともいへよう。藤村の童話は全部がさういふものであるといつてもいい。」（四九—一七一頁）そして、「古くさい

ユウモアが多く、ユウモラスな童話作家とは未だいふことが出来ない。」(五〇)(一七二頁)と指摘し、が、「和やかな愛情に満ち、静かな喜びを感じさせる童話である」(五一)(一七三頁)と述べる。

この後、藤村は昭和18年8月に他界するが、生前の藤村童話評で見る事ができたものは、以上の三つである。

更に、前田晁は『幼きものに』と『ふるさと』(『藤村研究』16(『島崎藤村全集』第16巻付録)新潮社 昭26・3 三三頁)で、『幼きものに』と『ふるさと』の間のわずか三、四年の間に、『新生』を書き終わった精神の解放感・安堵感から『ふるさと』の表現はより立派な童話集のものに変化したと述べるし、坪田譲治は『藤村童話覚書』(『藤村研究』16 六頁)で、『藤村童話を詩と同じ位高く評価し、愛情の文学であるが、父親の文学であり、「その形でなく、その内包する感情や精神に童話としてのローマンズ性があるのである。」(七頁)といい、「たとへ子供に面白くなくても、そこに特色があつて、そこが珍重して読まれるところであるかも知れない。」と述べる。

この『藤村研究』16の編集室による『編集記』(八頁)で、『愛児叢書』第一篇として出版した『眼鏡』があり、……自身の少年時代より青年時代にかけての経験を取材の特色とする藤村の少年読物の中でも、殊にユニークな存在である。その中の或る部分は、後の『力餅』の中に再び取り上げてはるが、自選童話叢書の中からも切り捨てられ、その作品の姿や内容に就て、これを捨てた藤村の意図は検討さるべきである。」と指摘する。

矢沢邦彦は『藤村の童話について』(『信濃教育』800 昭28・8 三〇頁)で、『幼きものに』と『ふるさと』を評価し、『藤村は芭蕉の文の単純化されていて、含蓄の多いことをくりかえし述べている。かれは童話を書く時でもその事を忘れなかった。しかし、その半面

に、読む少年たちのことは忘れられているのではないかと思う。」(三三頁)と、藤村の思いと文体の隔たりを述べる。

塚原健二郎は『童話作家としての藤村』(『文藝』臨時増刊号(現代文豪読本II)河出書房 昭29・9 九五頁)で、童話の中の言葉をとらえて、「いのちと、光りと、光りに向って高くはばたくもの。これこそは、明治二、三十年代のロマンチズムの高揚した精神にさ、えられて成長した藤村の文学に一貫して流れるものではなかつたか。」(九七頁)と、評価の違う詩や小説と童話の共通点を見出す。

荒正人は『藤村論について』(平野謙『現代作家論全集』2 島崎藤村』五月書房 昭32・11 一七七頁(『日本読書新聞』昭31・8 9の転載))で、童話作家藤村とは「詩人藤村の変貌または余韻の一つと」(一九三頁)とらえる。

山室静は『藤村童話について』(『児童文学の展望 児童文学II』角川書店 昭31・9 一二八頁)で、彼の童話に対する態度は詩や小説作品と同様にとても誠実で、『藤村童話も、ごく大まかにいえば、……孤独と現在への失望の中から、未来を形づくる子供に訴えかけるべく書かれたものといえる』(一二三頁)と見るが、「作者……の自信にかかわらず、藤村童話は一般にそれほど尊重されてもいず、児童にはまして愛読されてはいない。最近ではことにほとんど読まれていないからである。」(一三五頁)と現状を示し、その原因は『藤村童話は童話の童話たる特質——日常的リアリズムを自由にのりこえうる強味をまったく生かしていない。』(一四〇頁)と指摘し、藤村自身もそれに気づいてはいたのだがと述べる。

石井桃子は『藤村の童話』(『島崎藤村全集月報』9 筑摩書房 昭31・10 三頁)で、大正7年の『赤い鳥』創刊に始まる新しい日本の児童文学が生まれようとしていた頃に、『幼きものに』が淡々と

した、美しい口語で書かれたこと、いまも古くない、正しい口語文で書かれたことに感激するが、詩人藤村らしく一編一編が、すぐれた散文詩、寓話の印象をあたえるとしながらも、四冊の童話がいずれも短編的、随想的なため、すぐれた作家による太い柱のおとつた長編のなかったことを痛恨事と述べる。

再び、山室静は「藤村の童話『ふるさと』と『おさなものがたり』にふれて」(『島崎藤村全集月報』17 昭32・3 一頁)で、先の「藤村童話について」で述べたあまり子供たちに読まれない現状の上で、藤村は童話というものにより理解、つまり、「童話のもつ無限ともいべき可能性も、独得の世界も見落すことなく、極めて豊かで柔軟な見方」(三三頁)、童話観を持ちながらも、藤村童話が枝葉を切りすてて要点だけを浮き上がらせたために童話にあるべき(無邪気な遊び)が消え、そしてつねに父親、大人の立場に立っていたため、子供の世界にとけ入ることができず、のびやかで豊かな童話の世界を開くことができなかったと指摘する。が、『ふるさと』と『おさなものがたり』に描かれた信州の自然への愛を教えてくださいる点に強く関心を示す。

藤村の未亡人となった島崎静子は「藤村と童話」(『島崎藤村全集月報』17 三頁)で、雑誌「処女地」発行前後の大正12年頃、同人諸姉の集まりで、藤村が「私の創作の中で童話は残るでしょうか。童話は残るかと思いますが……」(四頁)と言った話や日常生活の中で藤村が示したエピソードを紹介し、童話執筆の熱意が最期まで衰えなかったことを述べる。

更に、山室静は「桃の雫」と「力餅」解説(『島崎藤村全集月報』19 昭32・4 一頁)で、『力餅』には「少くとも高校生くらいにならないと、身に合うようにならない話がかなりある。」(三三頁)

と、藤村の童話への見識がかえって子供にとってわかりにくいものになっていく弱みを指摘する。

石岡康代は「島崎藤村の童話」(『実践文学』4 昭33・6 実践文学会 一三頁)で、『眼鏡』は別として、童話のかかれた時期に共通点を見出し、順に、パリ帰朝後、『新生』執筆後、病後、『嵐』夜明け前」の時代を経て、海外旅行後と、「どの作品も藤村の生活を左右するような大きな役割をもつものと思われる旅、事件の後に一息ついた……時期に書かれていることである。」(二七頁)と指摘し、童話執筆の動機に、「精神のゆきづまりにたいして、『新生』の中にいう心、(何よりも先づ、自分は幼い心に立ち帰らねば成らない)」(一九頁。傍点は石岡による。)という心を指摘する。「だから、藤村の童話は、普通の童話と云うよりも、童話的新形態による自伝的短篇作品としての味の方が勝っていて、子供には教訓的な匂いのする、なじめない童話になってしまっているのではないだろうか。」(二〇頁)と述べる。

塚原健二郎は「特集 現代児童文学事典」(『島崎藤村』の項(『国文学解釈と鑑賞』27 113 11月臨時増刊号 昭37・11 八四頁)で、「藤村が童話の対象を、児童だけに限っていない」(八五頁)と述べるし、同書「おさなものがたり」の項(一一〇頁)で、佐々木元一は「言葉のたいせつさ、ながい人生での経験として生かされた動かぬ藤村の姿を読みとらなければならぬ。」と述べ、滑川道夫は「わが子の成長につれて、与えかたも考え、程度を高めてきている。……それだけに、子どもに身構えをさせて読ませなければ藤村童話の真価は理解させにくいものである。」(一一一頁)と述べる。

古田拡は「児童文学概論」(第九章 島崎藤村論)(福田清人・滑川道夫・鳥越信編 牧書店 昭38・1初版・同40・5第4版 一三

九頁)で、藤村の「童話だけは残る」ということばは「孫を愛する七十の老翁の思い入ったところ」とことば(一四六頁)から発つせられた(心理的理由によるもの)(一四四頁)で、石井桃子の指摘する「四冊の童話……のいずれもが、あまりにも短編的、随想的だということ」(一四三頁)を支持し、藤村童話の意義は「話しことばの童話」(一四七頁)と見るところに価値を見出せると述べる。

鳥越信は「幼きものに・力餅」(国文学解釈と鑑賞)31-11(特集 島崎藤村研究図書館) 作品論—児童文学 昭41・9 八三頁)で、「たしかに内容といい、形式といい、世界の児童文学の中で、この四冊はA(アナトール)・フランスの『少年少女』に最も近い。」(八四頁)と指摘する。

福田清人は「藤村の童話」(『藤村全集』月報10〔第8巻付録〕筑摩書房 昭42・6 六頁)で、藤村童話は詩人藤村の望郷の思いのあらわれであり、副次的に、伝記資料に大いに役立つものがあると述べる。

宮口しづえは「藤村の世界と私」(『藤村全集』月報11〔第9巻付録〕昭42・7 五頁)で、昭和3年5月に木曾で「言葉」という演題でされた講演で藤村が「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」とくりかえして言われ「た記憶を紹介し(六頁)、「単なる懐古ではなしに、自分の心につながる深い何かを伝えたかったにちがいないと思う。」(五頁)と述べる。

三好行雄は「『力餅』について」(『藤村全集』月報12〔第10巻付録〕昭42・8 六頁)で、「父に見られている子の世界へ自己を解放する。」(七頁)が、母が不在で、「夜明け前」の完結後五年を経て、刊行されたことの意味」に着目し、「そのとき、藤村は晏如として、すべてを良しとする心境にすでに達している。」とみる。更に、回想

的性格が顕著で「『力餅』は童心からますます遠ざかった場所で、滋味掬すべき人生の知恵について語る。」(八頁)と述べる。

菊地重三郎は「藤村の童話」(『太陽』105号(特集・藤村と木曾路)平凡社 昭47・2 八六頁)で、藤村の童話は「慈父が幼い子供を相手に知恵を訓え解き聞かせる話として比類ないもの」であるが、「ふるさと」だけは他の三冊と異なって、「童話」らしく、「子供の話者には……この本だけは素直に興味をひくらしい。」と述べる。

田中富次郎は「藤村童話の再評価——仮託的手法について——」(初出は「信州白樺」17 昭50・4。『島崎藤村』作品の二重構造』桜楓社 昭53・1 一五〇頁に再録)で、フランスに三年程滞在して「中世を探求する心」と「子供心」が培われたと指摘し、「幼きものに」所収の第一〇話「鰐」、『ふるさと』所収の第二九話「生徒さん」、今日は「第五四話「冬の贈り物」を例に挙げて「新生」との表裏関係、二重構造を指摘し、『をさなものがたり』所収の第三四話「太陽の出る前」を例に挙げて「夜明け前」と「東方の門」へも裏返す、仮託を見出し、『力餅』所収の最後の話である「ほゞづき」を取り上げて、「省略の効果」を述べ、「藤村童話は藤村芸術の源泉であった」(一七七頁)と述べる。

和田謹吾は「藤村童話・その底に流れるもの」(初出は『日本児童文学体系』9 ほるぷ出版 昭52・11。『島崎藤村』翰林書房 平5・10 二二七頁に再録)で、藤村童話が父の文学であると見る点とは同じであるが、先の榎本楠郎・坪田讓治・三好行雄が「幼きものに」を藤村童話の出発と見るのに対し、「素直に『眼鏡』を第一作として考慮に入れるべきだと」(二三三頁)述べ、「『力餅』に至って、藤村童話は初めて躋の緒を切って独立性を獲得したともいえる」(二三九頁)とし、「そもそも藤村童話成立の契機は失われたと見る。

鳩貝久延は『ふるさと』——藤村の童話——(伊東一夫編『島崎藤村——課題と展望——』明治書院 昭54・11 三七二頁)で、『童話』『ふるさと』は、ふるさとへの愛着と憧憬が渾然と一体となった作品である(三七九頁)と述べ、山室静が子供の眼で眺めていないとした藤村童話の問題と想像力の乏しさを支持し、「自己の心情を語るという自然主義的方法と写生という手法は、藤村の童話にリアリズムの面から作品を見ると、その当時の童話になかった面をもたらししている(三八三頁)と指摘し、この「リアリズムの手法を童話に導入し(三八四頁)たことを高く評価すべきものである」と述べる。

富田和子

近代文学研究室「島崎藤村(昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第51巻 昭和女子大学近代文化研究所 昭55・11 一七五頁)では、「三、業績」担当の赤松昭は、藤村が童話に手をそめた動機について三好行雄の『力餅』について(『藤村全集』月報12〔第10巻付録〕から紹介するのみである。

宮沢薫は「教育現場から(二)『藤村の童話』の再発見(『文学と教育』〈季刊〉117 文学教育研究者集団 昭56・8 五〇頁)で、『童話が、『夜明け前』を境に前後して書かれたこと』を意識し、「子どもの発想に揺さぶりをかける語り口で語られている。……子どもとの徹底した対話精神により、未来を負う子どもたちの可能性と可変性に向けて、ひたすらに、人間の尊厳をテーマに生命・労働・精神に関する話が語られる。」(五一頁)と見て、「子どもへの期待感を持った温い励ましの文学である。」(五二頁)と述べる。

飛田文雄はこれまで伝記や小説等との関わりの中でしか扱われなかった藤村童話をはじめで中心に据えて論じた『藤村の童話 その位置と系譜』(双文社出版 昭58・4)で、童話が藤村研究の中で重

視されない理由を考えると、藤村自身が、童話というものを、どう考え、どう扱い、その創作にどんな姿勢をとっていたかを問題にして、回顧、随想、作品、童話、行為の五つの視点から、童話への愛着が薄れなかったことを述べる。そして、幼年期の体験を題材とした『ふるさと』、少年期の体験を題材とした『をさなものがたり』、青年期の体験を主たる題材とした『力餅』、壮年期の体験を題材とした『幼きものに』があり、これらに続く老年期の体験を題材とした老年童話の準備があったこと(三三三頁)、童心というよりも(自然心)で望むことや(六五頁)、「子どものための創作をしない」ときは、子どものための書の編集と出版を行って、それを補っていた(二六〇頁)と指摘し、藤村文芸における童話の見直しを迫る。

赤尾利弘は「藤村童話『ふるさと』の位置」(『文学と教育』5 文学と教育の会 昭58・7 一六頁)で、藤村が柳田国男の『遠野物語』を読んだ感想文(『後の新片町より』)の中の「遠野物語」(43・7)と『夜明け前』の間に『ふるさと』を位置付けて見ると、「自己の見聞した思い出や原光景を語(二二頁)り、「その時代、その地域に根ざした思想の真実をつむぎ出(二二頁)すことが藤村文学の奥底にあることがよくわかり、更に、フランスのリモージュの田舎を見て「東西文明を相対化できる地点で、父親及び父の時代再評価という問題意識をかかえこんだ(二四頁)ために、『夜明け前』の前に、『ふるさと』で「父と自分との在りし日の思い出につながる故郷の日々にさかのぼり、それを再現しておく必要があった。」(二四頁)と述べる。

上総英郎は『のぞみの国』「解説」(島崎藤村・沖野岩三郎・賀川豊彦・吉田絃二郎・有島武郎 日本キリスト教児童文学全集2 教文館 昭58・11 一八七頁)で、藤村の童話「幸福」(一)をさなもの

がたり』第三話)を引いて、童話の場面状況の細部を省略することで、「読者である子供の心に余白を残しておきたかったからなのです。」(一八九頁)と述べ、「魔法づかい」(『をさなものがたり』第三六話)を挙げて、想像力を刺激する童話の効用を述べる。

宮沢薫は「『文学史の中の児童文学』藤村の童話」(『文学と教育』〈季刊〉125 文学教育研究者集団 みずち書房 昭58・7 四〇頁)で、「藤村の童話」は、人間喪失、文体喪失の当時において、人間回復の原点を言い当てている(四一頁)と述べ、現代の子供たちにとっても「子どものメンタリティに揺さぶりをかけ、自己凝視による自己確認と自己否定をしながら、自己変革を迫る、子どもの魂を培う文学」(四四頁)として魅力があると述べる。

神田重幸は「島崎藤村 その姿勢にふれて」(『国文学解釈と鑑賞』48-14 〈特集―児童文学の世界〉昭58・11 一五七頁)で、「藤村の童話への意欲は、自分の子供らを思い、自らの生の危機の超克として汚れない童心の世界から出直そうとするその生き方と常に血縁的ななかで生まれていったのであり、それが作品としての童話の内実を規定していた」(一五九頁)と述べる。

高橋昌子は「藤村の童話」(現代文研究シリーズ15「島崎藤村」(『国語展望』別冊43号)尚学図書 昭61・5 五九頁)で、「自己の幼少年時代という素材、語りかけるといふスタイル、そして生命肯定的な認識の三者が結合したところに成立したのが〈お伽話〉の情調」の表現としての藤村の童話であった。(六〇頁)と述べるが、「別の作品群と合わせ読まれることによって藤村の童話ははじめて光を放つのである。」(六四頁)と、小説などとの関わりを重視する。

五十嵐康夫は「藤村の童話」(『国文学解釈と鑑賞』55-4 〈特集 島崎藤村の再検討〉平2・4 一二七頁)で、「藤村童話の特色は

……〈郷土文学性〉と〈寓話性〉が際立っている(二三〇頁)で、興味性が少なく、「現在ではほとんどの子どもに読まれなくなったが、……創作志望者は、〈言葉〉で苦しんだ藤村の文章からは多くのことが吸収できるであろう。」と、童話に看過できない大切な点を強調する。

瓜生清は「ふるさと」(伊東一夫・青木正美編『肉筆原稿で読む島崎藤村』(島崎藤村コレクション第四卷)国書刊行会 平10・12 一六五頁)で、「『ふるさと』の特色は、衣食住に関する人間の営みが、所与の自然と密接に交渉しており、単なる木曾の風物詩ではなく、現代では失われてしまった人間の暮らしと自然との牧歌が成立していることであろう。」(二六七頁)「しきりに強調されている〈手造り〉への愛着心は、後年思想的に煮詰め直され、〈生活者の文学〉として大成していく藤村文学の基盤を成していくのである。」(二六八頁)と述べる。

ここまでの多くの藤村童話論は、『眼鏡』を藤村童話に入れるかどうかの問題を除けば、父として語りかけるといふ表現形式を手に入れたとはいえ、自分の体験に則して語っているところから、藤村の童話は彼の伝記の一部であり、長編小説との関わりを常に念頭において読まれるべきものという見方が大方の見方である。

そして、私は、藤村が50歳の時に「早稲田文学」6(大10)に載せ、『飯倉だより』に収めた「童話」の一節「大人に聞かせたいこと」と、子供に聞かせたいと思ふことがある。」という言葉に惹かれて、六つの観点から論じた。

それは、まず、「大人に聞かせたいことと、子供に聞かせたいと思ふこと——藤村童話——」^③で、藤村の子供を見る目と表現感覚を押さえ、『幼きものに』の構成から「子供に聞かせたいと思ふこと」の

考察を試みた。その結果、藤村は、自分が見落として来たものや、見誤ってきたものを、又は畏敬し遠ざけてきたものを、フランスの田舎の子供達が見せた、純真で先入観のない好奇心おおせいの眼に学んで、誇張することなく表現しようと試み、童心への一方的な思いいれから、親子の対話が生れるような親しみのこもった童話創作に憧れたと考察した。

次に、「新たな暮らし像求め」——藤村童話から——⁽⁴⁾で、父親である藤村が童話に込めた「新たな暮らし像」を見る視点から、彼の童話形式について、「時間」「才能」をキーワードとして、外国暮らしを経験した後で子供達に聞かせようとした「愛情」の塊のような『幼きものに』を考察した。そこには、旅と日常の対比を通して、子供の持っている「時間」や「才能」から可能性への夢を、彼の求めた「新たな暮らし像」に投影する試みが窺われ、彼の童話形式であらうと考察した。

三つ目は、『幼きものに』鰐の懺悔話と幸福⁽⁵⁾で、『幼きものに』に登場するたくさんの動物の中で、鰐・兎・狐・雀の世間のイメージと藤村親子の共通のイメージを確認し、日本の昔話などとの扱われ方の違いなどから考察した。そして、外国帰りの彼が子供達のために誇張することなく表現しようとした、(風物や文化は違っても、物事の善悪や精神は変わらない)という身近な事柄の大切さ・幸福を、童話形式によって、子供達のために人生の詩として語ろうとしたと考察した。

四つ目は、『力餅』と『ハムレット』——藤村童話から——⁽⁶⁾で、藤村の西洋文学の影響を童話にまで広げ、藤村童話の内、青年期の体験などを題材とした『力餅』への『ハムレット』の内面的な影響をよみとり、表現しようとしたところを検討した。そして、教育的・

教育的に捉えられがちな藤村童話ではあるが、青春の中でバラドックスに陥って苦悩するハムレットのような悲劇を避けて、新しい時代が到来する中で、『力餅』は「自由な舞台」に生きるための表現を試みたものであらうという結論に到った。

五つ目は、『藤村童話と『フランクリン自伝』⁽⁷⁾』で、藤村童話四作と『フランクリン自伝』を、パブリックコミュニケーション研究の一問題点、メッセージの送り手の信頼性を意識して比較し、類似点等から考察した。そして、両者の示した教訓の度合も影響力も違うものの、疎外からの救済を求めて、幼年期からの自己の体験をユーモアで演出して描き、子供に演出したい自分自身の存在を伝える目的が共通して、藤村童話の根底にある「子供に聞かせたいと思ふこと」は、自分自身の存在であると考察した。

最後の六つ目は、『藤村童話——『力餅』の可能性とメッセージ——』⁽⁸⁾で、まず、藤村の子供観やユーモアの理解度と意識を確認しながら、『力餅』に描かれている時代の庶民感覚を意識して、読み取れる藤村のメッセージを検討した。その結果、日本浪漫主義の新体詩人であり、日本自然主義文学の代表作家であるという従来の評価に安住しないで、彼の「童話は残るかと思いますが。」と言った言葉に芸術家としての冒険心を見出すべきであると考察した。

さて、これまでの論者のほとんどが藤村の作品の内、詩や長編小説から藤村文学を読みはじめられておられると推測する。が、この六つの視点から考察し感じたことは、前項で紹介した久保田正文が藤村童話から藤村文学の世界に入っていたように、藤村が藤村童話を読ませたい、聞かせたいと願った子供たちは、藤村童話から藤村文学の世界に入っていく可能性はあったし、藤村はそれを望んでいた

と思う。藤村童話の根底にある「子供に聞かせたいと思ふこと」は、自分自身の存在であることは確かであると思うが、藤村童話を小説の付録といった扱いではなく、藤村文学への入り口に位置すると見るべきではないか。

まとめ

「小学校の六年生か中学の初め頃に、もし来世というものがあつてもう一度何かに生まれ変わるとしたら、もう人間を選ぶはずに他の動物を選びたいと思つたぐらい学校嫌いでした。」と語つたことのある司馬遼太郎が、小学校国語教科書「小学国語」(大阪書籍 昭63)に、幕末の名医、緒方洪庵の生き方を描いた「洪庵のたいまつ」(5年生向け)・子供たちに寄せる期待を綴つた「二十一世紀に生きる君たちへ」(6年生向け)の二編の読み物を書き下ろした。

それも「書き終えてから、(一本の小説以上のエネルギーが要る)と周囲にもらしたという」程の力の入れようであり、この時は残念ながら公立小学校でのこの教科書の採択はゼロという結果であつたが、「二度、小学生のために書きたいと思つていたので、それを果たすただけで十分、満足。」と語つたという。

また、「心にコドモがいなくなつているオトナがたくさんいますが、それはもう、話すにも値いしない人間のヒモノですね。」と、自戒するかのようによ葉を残した。

そして、「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」ということを考えた時期のあつた大江健三郎が、その疑問を主題にして童話を書いた。それは、子供の素朴な疑問に世界のノーベル賞受賞者たちが一つひとつ答えるというドイツの新聞社がたてた企画で、平成6年

の受賞者である大江のテーマが「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」。

そこで、彼が感じたことは、現在の自分が過去の子供たちとつながつていて、彼らの分まで生きて、更には未来の子供たちともつながつていて、彼らを実感するためであり、友達の役に立つという新鮮な喜びの発見を積み重ねること、生活の中で見つけた芽を、現在の「自分の心のなかにある深く豊かなものを確かめ、他の人につたえ、そして自分が社会につながつてゆくための言葉」に育て、確実な言葉……他の人たちとつながつてゆくための言葉」に育て、確実なものにしていくために学校にいく、といったことを、「童話のような、静かに語りかける文体で説」き、「このような形で若者にさまざまなことを伝えていきたいと、大江さんはいま考えている。」と紹介された。

また、朝日新聞が行つた「この一〇〇〇年「日本の文学者」読者人気投票」では、藤村の27位を抜いて、18位にランクされた大江は、『小説の経験』「文学再入門」で、幼い頃からの読書体験を語りながら、「読書には時期がある。その本について、その人にとって、本当にジャストミートする人生の時があるということは本当だとつくづく思います。」(二三頁)と、これまでの生き方を良い小説を読むみ返ししながら反省しつつ、「良い小説は根本的に人を励ます力を持つと私は考えています。」(三八頁)と、未来を感じ、新しい世界を模索する。更に、「生きてゆく上での文学の有効性ということを疑つていないのです。」(二〇八頁)「つまり未来の人間のありかたを考えるためのモデルとして文学は役立つものでなければならぬと思ひます。」(一一六頁)と語っている。

つまり、藤村が「語りかける文体」で童話を書き、『力餅』の

後に」で、「うん、ちゃうど、いゝ」と言つて下さる時まゐりませう。」と期待したのと同じことが、現代でも期待されているのである。

藤村をはじめとして、一流作家に共通してみられる子供への思い。そして、それぞれの思いが生まれた心の成長に着目することで、作家の童話について、従来の視点にとらわれず、新しい視点を模索することができるのではないかと思う。更に、藤村の「大人に聞かせたいことと、子供に聞かせたいと思ふことがある。」という言葉により一層理解できるようになる。現代の司馬や大江の言葉が示唆するところは大きい。

(平成13年9月)

富田和子

注

- (1) 佐々木雅發『島崎藤村』(日本文学研究資料叢書 有精堂出版 昭46・2初版・同48・4再版)「解説——島崎藤村研究史——」(三一―八頁)から、引用する。
- 榎原美文「藤村研究の史的展望」(『日本文学』昭三一・三)
村松定孝「藤村を研究する人のために」(『国文学』昭三一・七)
荒 正人「島崎藤村——近代作家像への照明——」(『日本読書新聞』昭三一・八、九、のち「藤村論について」として、平野謙『島崎藤村』五月書房・昭三二・一一に所収)
川副国基『島崎藤村論』について(『解釈と鑑賞』昭三三・三、のち『近代日本文学論』早稲田大学出版部・昭三四・一二に所収)
瀬沼茂樹「島崎藤村研究史」(『近代文学鑑賞講座』第六卷「島崎藤村」角川書店・昭三三・九)
- 吉田精一「研究史通観」(『国語国文学研究史大成』第一三卷「藤村花袋」三省堂 昭三五・四)
猪野謙二「島崎藤村」(『近代文学研究必携』学燈社・昭三六・九、のち「藤村研究略史」として『島崎藤村』有信堂・昭三八・八に所収)
畑 実「島崎藤村の研究」(『国文学』昭三九・六)
和田謹吾「島崎藤村の研究」(『解釈と鑑賞』昭四一・八)
榎本隆司「最近における島崎藤村研究の展望」(『国文学』昭四一・一二)
山田 晃「研究史と研究の現状」(『島崎藤村必携』学燈社・昭四二・七)
- (2) 『藤村全集』第9巻 筑摩書房 昭42・7 一〇六頁―一〇七頁
(3) 「椋山女学園大学研究論集」30(人文科学篇) 椋山女学園大学 平11・3 九一頁
(4) 「椋山国文学」23 椋山女学園大学国文学会 平11・3 九九頁
(5) 「文化と情報」2 椋山女学園大学短期大学部 平11・6 二三頁
(6) 「椋山国文学」24 椋山女学園大学国文学会 平12・3 六七頁
(7) 「椋山国文学」25 椋山女学園大学国文学会 平13・3 八五頁
(8) 日本大学大学院総合社会情報研究科文化情報専攻修士課程修士論文二〇〇〇 平13・1 提出
(9) 司馬遼太郎「師弟の風景 吉田松陰と正岡子規をめぐって——大江健三郎——」(『別冊文藝春秋』173号 昭60・7)。「八人との対話」文春文庫 文藝春秋 平8・5 一二五頁所収。
(10) 「司馬さんも負けた——公立小学校執筆教科書採択ゼロ——」広域採択制で「寡占のカベ」朝日新聞 昭63・9・10(土)朝刊14版 三〇頁
(11) 神山育子『こどもはオトナの父 司馬遼太郎の心の手紙』朝日新聞社 平11・10 二六四頁
(12) Kinder fragen, Nobelpreisräger antworten 「子供たちが尋ねて、

ノーベル賞受賞者が答える」の第5回 Städtische Zeitung Magazine No.15 14.4.2000に発表された。(子供の疑問に答えて

ノーベル賞作家大江健三郎が書いた〈童話〉『週刊朝日』2000.8.4朝日新聞社刊 一三〇頁掲載。)

(13) 大江健三郎「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」「子供の疑問に答えて ノーベル賞作家大江健三郎が書いた〈童話〉『週刊朝日』2000.8.4朝日新聞社刊 一三三頁。

(14) 注13と同書 一三〇頁掲載の見出しの文章。

(15) 朝日新聞 平12・6・29 朝刊 12版 24面、投票総数二〇五六九通。因みに、上位30位は、次の通り。○数字は順位。漢数字は得票数。

- | | | | | | |
|--------|------|--------|------|--------|------|
| ①夏目漱石 | 三五六 | ②紫式部 | 三二五七 | ③司馬遼太郎 | 一四七二 |
| ④宮沢賢治 | 一二七五 | ⑤芥川龍之介 | 一一四九 | ⑥松尾芭蕉 | 八〇五 |
| ⑦太宰治 | 七五四 | ⑧松本清張 | 六七三 | ⑨川端康成 | 五九五 |
| ⑩三島由紀夫 | 五四二 | ⑪有島武郎 | 四六二 | ⑫村上春樹 | 三六四 |
| ⑬遠藤周作 | 三四七 | ⑭清少納言 | 三三一 | ⑮与謝野晶子 | 三三二 |
| ⑯森鷗外 | 三一〇 | ⑰吉川英治 | 二七五 | ⑱大江健三郎 | 二〇一 |
| ⑲村上龍 | 一七九 | ⑳石川啄木 | 一六一 | ㉑谷崎潤一郎 | 一六〇 |
| ㉒井上靖 | 一五四 | ㉓三浦綾子 | 一四〇 | ㉔安部公房 | 一四〇 |
| ㉕高村光太郎 | 一三五 | ㉖藤沢周平 | 一三三 | ㉗島崎藤村 | 一二七 |
| ㉘中原中也 | 一一八 | ㉙小林一茶 | 一一二 | ㉚芹沢光治良 | 一一一 |

(16) 大江健三郎『小説の経験』朝日文芸文庫 朝日新聞社 平10 第1刷。この中の「文学再入門」は、テレビの連続講座NHK人間大

学で、平成4年10月から12月までの三ヶ月間に12回に亘って放映されたもの。

(17) 『藤村全集』第10巻 筑摩書房 昭42・8 五一―五頁

(付記)

本稿は、「藤村童話——『力餅』の可能性とメッセージ——」(日本大

学大学院総合社会情報研究科文化情報専攻修士課程修士論文二〇〇〇平13・1提出)の「序論 I 藤村童話研究史」を基にいたしました。